

R. バートンの音楽療法に関する一考察
——『メランコリーの解剖』第2巻を中心に——
光平有希

太古から現代に至るまで、人間は心身の治療や健康促進・維持する手段として音楽を用いてきた。私は、そうした音楽療法の奥深い歴史の中で生み出された大いなる遺産を紐解いていくことが、現代の音楽療法理解にも繋がると考えている。その一例としてここではロバート・バートン Robert Burton (1577–1640) を取り上げてみた。というのも、主著である『メランコリーの解剖 The Anatomy of Melancholy』において彼は、メランコリーに対する音楽の治療に「治療としての音楽」という題名で1節を割いて言及しており、これは恐らくや初めての音楽と医学に関するまとまった記述だと考えられるからである。このことは、音楽療法の歴史を考える上で非常に画期的なものであり、ここには音楽療法的な萌芽が見られるといっても過言ではないだろう。

しかし同書についての研究に関しては音楽に焦点を当てての考察はあまり見当たらない。音楽に関する記述が多く含まれる第2巻については翻訳も未だ出版されておらず、研究は皆無である。そこでバートンの『メランコリーの解剖』の中でも、音楽についても言及をしている第2巻に焦点を絞り、考察を加えていった。

その結果、「治療としての音楽」は音楽療法の例、音楽の持つ効果と逆効果の例とが混在しており、古来から続く逆療法的な概念が見られ、更には中庸的な概念も含まれるものと捉えることができた。また、バートンがメランコリーの治療に音楽を用いることに関しては、アラビアから始まって中世に受け継がれた伝統にまで遡るものではないだろうか、という結論に至った。